

2017年10月1日

麻生教会主日礼拝 説教

「揺るぎない土台」

ヨハネの黙示録 13章 1節～14章 5節

久保哲哉牧師

1. ヨハネが見た幻・ローマ帝国による支配・獣の数字の意味

「わたしはまた、もう一匹の獣が地中から上って来るのを見た。この獣は、小羊の角に似た二本の角があって、竜のようにものを言っていた(黙13:11)」

ここで出る子羊とは明らかに「主イエス」のことです。ですから、この「獣」は一見、穏やかで、主イエスのように「人々を救う者」かのように見えたのだらうと思います。しかし霊的な目で見たならば「竜(サタン)」のようにものをいっていたといえます。

続いて12節では「この獣は、先の獣が持っていたすべての権力をその獣の前で振るい、地とそこに住む人々に、致命的な傷が治ったあの先の獣を拝ませた」とあります。

この「致命的な傷が治ったあの獣」とは当時のローマ帝国をさしていました。そして獣の頭は「ローマ皇帝」です。この獣(ローマ)は頭(ローマ皇帝)を失うことで死ぬほどの傷を負った(当時のローマ皇帝は次々に暗殺されていた)のですけれども、それが復活したために(ローマ帝国の力はまったくそがれることなく、ただ皇帝の首がすげ替わり、ローマ帝国の支配自体は少しも弱まることがなかったために)、人々はそこに神的な力をみて、「獣」を拝むよう(皇帝礼拝する)ようになったという事実が秘められていたことを先週みました。

おそらく2000年前当時の人々は「海から上がってきた獣」という表現を見ただけでヨハネの見た幻が「地中海全域」に及ぶ「ローマ帝国の支配」を見据えていることにピンときたのだらうと思います。このローマ帝国の支配がいかに「サタンの」であり、主なる神から人間を離れさせ「神を愛し、隣人

を自分のように愛する」という「キリスト者のなすべき務め」から人々を離れさせるものであるか。幻はそのことに言及しているといっておよいでしょう。

今回出る獣はまた別の脅威でありまして。すなわち「先の獣<ローマ帝国>を拜ませ、人々を神から離れさせる」。その実行部隊のことといっておよいでしょう。その獣の正体は一体何か。これが今日の焦点となります。

続いて14節・15節も見てみましょう。「更に、先の獣の前で行うことを許されたしるしによって、地上に住む人々を惑わせ、また、剣で傷を負ったがなお生きている先の獣の像を造るように、地上に住む人に命じた。第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拜もうとしない者があれば、皆殺しにさせた」とあります。

2. 「神を信じる」ことと「お金を信じる」こと

ここに「剣で傷を負ったがなお生きている先の獣の像」を造らせたとありますが、ギリシャ語の原文では「獣の『のための』像」となっています。つまりローマ帝国の支配『のための』像」を造らすのが、獣の役割であったということでしょう。そして極めつけはこの獣の名は「6 6 6」という有名な数字が当てられている人間であるとあります。現代の私たちではよく意味が通らない幻ですが、さあこの「獣」とは一体何者のことなのでしょう。

まずはこの「6 6 6」という数字からみていきましょう。

ある映画がきっかけで「呪いの数字」というイメージが先行していますが、結論からいうと、この数字は「皇帝ネロ」を意味するとされています。

それはなぜかという。2000年前当時のギリシャ語では数字という数のみを表す概念が言語的になかったために、英語で言えばAが1。Bが2を現すという形で、1文字1文字に数字が割り当てられていました。理解の助けになるかと思い、一応プリントを配布したのですが、これは「ゲマトリア」という手法でありまして、例として「マリア」をあげておきましたが、マリアだったら152になる。

ただし、数字だけ言われても誰の名であるかはなかなか検討が付きません。

ですから長いこと謎とされていたのですが、古代の書物を確認するとだいたい、4～5世紀の人々はこの数字を「ネロ」だと理解していたという証拠が色々あるようです。

そう読むと、「獣のための像」「ローマ帝国（支配）のための像」という言葉が、ある意味を持ち出すのです。通常、この像は、皇帝礼拝をするために、刻まれた像として理解するのですが、どうしても興味をひくもう一つの説がある。それで印刷しておいたのですが、当時の「貨幣」「通貨・コイン」には当時の「ローマ皇帝の像」が刻んであるのです(最終頁の『配付資料』を参照)。ちなみにこれは皇帝ネロの時代のコインです。

2000年前当時の歴史をみると、ローマ帝国がなぜあれだけ協力的な支配をもたらしたのか。通貨をつかった「古代資本主義の発展」がその繁栄と支配をもたらしたという分析があります。クリスマスによく出る皇帝アウグストゥスが「通貨の整備」をしたことで、急速に「お金」が力を持ち始めたのです。それで主イエスの時代からヨハネ黙示録の時代まで約60年。急速に人々の生活が変わっていったとされます。その変化の中でヨハネは非常な危機感を靈的に感じていたのでしょう。

そう考えると、戦後の日本がこの約70年の間でどのように変化してきたのか。ヨハネが見てきたものと、わたしたちが見てきたもの。近いものがあると思わずにはいられません。

聖書に目をやりますと「そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である(黙13:17)」ともあります。ちなみに「刻印」と訳された言葉は「削る」とか「彫る」という言葉が名詞となった言葉で「貨幣」と訳すこともできる言葉のようです。ですから刻印を「貨幣」と置き換えて訳すところなる。「そこで、この<（皇帝ネロ）の貨幣>のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようになった(黙13:17)」

もつといえ、ローマのお金はまるで生きて動き出すようになり、強力な力をもって「獣の像(貨幣)がものをいう(黙13:15)」ようになったとも読むこ

とができます。ちなみに16節には「また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその左手か額に刻印を押させた」とあります。ここも原文を直訳すると「すべての者にその右手か額の上に刻印<(皇帝ネロ)の貨幣・お金>を与えるようにさせる」となるのです。

現代の日本でこれを見ると、よくわかりにくいと思うのですが、当時のユダヤ人たちは「神の言葉を額につけ、手に結ぶように」命じられていました。申命記6章5節以下「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、(中略)これをするしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け」なさいとされている通りです。

つまり第一の獣。ローマ帝国の支配。その実行部隊である「貨幣経済」。人々は「神の言葉」を額に刻むのではなく、「お金」「経済」の事ばかり考えている。救いをもたらす方として「神」を拝むのではなく、救いのために「お金」を拝んでいる。その状況を憂う幻と捉えることも許されることでしょう。

3. 資本主義経済の欠点・「呪物崇拜」の危険性

たとえば、僕は経済学部出身なのでどうしても目につくのですが、カール・マルクスという人が「資本論」という、要するに現在多くの国がとっている「資本主義経済」についての批判を書いた本ががります。社会主義とかマルクス主義の教科書として読むのではなく、資本とはお金のことですから「お金中心主義」を丸裸にして危険性を指摘した本として読むと興味深いのですが、その書物で、今日の黙示録の箇所を引用して、お金で取引する「商品」と「貨幣(お金)」の関係について至極簡潔にいうと次のように言っている。

たとえば2キロの米が1000円だったとする。この米は成人男子が朝昼晩、白米だけを食べたとして、何日か十分に生きることができる量。つまり「米2キロ」は人間の生命を少なくとも何日か、支えることができる「価値」がある。これは本来、お金によって代えられるものではないのです。だって本来、人間の命は他の何者とも「交換できるものではない」からです。

けれども、人はその本来、交換不能な「価値」を「お金」によって「交換できるもの」にしてしまったのです(これが進むと人身売買や臓器売買となるのでしょう)。これは、よく考えると恐ろしいことです。

もつという、お金の力というのは、そこで生きるすべての人々が、そのお金にそういう力を与えることに積極的に「信頼」することによって成り立つものです。お金は本当はそれ自体としては何の価値もない紙切れなのですが(千円札を食べても命を支えることはできない)、そこに「価値がある」と「信じる」ことで成り立つ経済。それが資本主義というわけです。この現象をマルクスという人は「呪物崇拜」とか「物神崇拜」つまり物を神として拝む。と呼んだのです。マルクスはもともとユダヤ教のラビ(先生)の家系でしたので、やはりこのような感覚に優れていると思います。つまり、キリスト教的に言えば、「お金を信頼する」というのはそれだけ「神を信頼しない」ことに繋がります。まさに偶像礼拝です。終わりの日には偽預言者が現れて、偶像礼拝が盛んに行われるということが伝統的に言われますけれども、その通りの現実がこの現代に、間違いなく起こっているのです。生まれたときからお金で生活するのが当たり前の僕たちはこの感覚がなくなっていますけれども…その霊的(信仰的)状況の乏しさ。「富んでいるがゆえの貧しさ」に対する悲しみ・信仰における危機感。これが、ヨハネの幻では語られているとあってよいであろうと思わされます。

そうすると、人間の思考にも、明らかに変化が起こる。極端な話。株式の世界、投資の世界などみると本当に顕著です。投資家にとってその企業が生産する商品の価値、さらにいえばその企業の価値というのは、何千万円とか、何億円とか。そういう「数字」でしかない。価値が「あがった下がったということ」に一喜一憂する。その企業の製品の「価値そのもの」になぞ目もくれない。だから、その会社が利益を上げないということであれば、すぐさま投資資本を切り上げて、その結果、その会社をつぶしてもいいから、別の利益をあげそうな会社に再び投資する。そこで働いている従業員の生活。命。その商品を待っている消費者の気持ちなど関心がなくなる。そして富は持てる者に集中していく。だから、儲かる人はとことん儲かるけれども、それ以

外の人々は皆苦しむことになります。

あるデータによれば2016年はたった「62人の富豪」が、「最貧層35億人(世界総人口の半分)」と同じだけの富を所有していたといわれます。ちなみに2010年には、世界人口の半分と同じ富を独占していたのは「388人の富豪」であったといえます。利益優先で他者を助けようとするとお金なくなりますから、そうした慈善の行為はどんどんなくなっていきます。「愛」は「資本主義経済」の敵です。愛がある者からこの経済競争から脱落していきます。構造的にはこうして「人間らしさ」が失われた社会になることははっきりしているのです。終わりの日には「愛が冷える」と言われるのですが、主イエスも同じ事を愁いでいたと思います。どこかで脱却しなければならないのですけれども、そういうシステムを未だ人類は発見できていない。そのような状況です。

4. 「報酬のために働く」のか・「働いた結果報酬を得る」のか

昨日、一昨日と幼稚園の研修会・公開保育にいつてきたのですけれども、そこでもそのことを思わされた。公開保育というのは他の幼稚園にお邪魔して、そこでどのような保育が行われているのかを学びに行く機会なのですが僕が行ってきた園は良くも悪くもすさまじかったのです。

まず、職員が子どもたちのことを「お子様」。保護者の方々を「保護者様」と呼ぶ。そして園紹介の際に副園長が「当園は『教育』を『サービス』と考えている」。だから「保護者さまやお子様はお客様」。保護者さまには様々なニーズがある。「『いすに座ってられるように』『文字の読み書きができるように』保護者様のニーズに応える『サービス』を提供することを目指す」と言い切ったのです。その方40～50代で、上から言わされているに違いないのですが、本質的には恐ろしいことと思って聞いていました。

確かに経済用語で「サービス」というのは「売買した後にモノが残らず、効用や満足などを提供する、形のない財のこと」をサービスと呼ぶので、「お金」と「教育」が等価で交換・売買されているという、そのような形・発想があるのも一つなのかと思うのですが、明らかな違和感を他の先生方も感じていた所でした。

僕自身も幼稚園はある主の「サービス業」だと思っているのですが、「サービス」のとらえ方がまったく違うことに驚きました。これは大事なことから触れますが、「サービス」の語源は「ラテン語 *servitus* (セルヴィタス)」という言葉で、もともと「奴隷」という意味があるようです。そこから「仕える」という意味になりまして。転じて「礼拝」という意味となったと聞いています。つまり「礼拝」は私たちが「神に仕える」ことですよね。それと同時に、いや、むしろ先んじて「主なる神が私たち人間のために仕えてくださる(十字架の福音)」が交わる場でありますから「礼拝」のことを「サービス」というようになったと理解してます。

つまり、教会幼稚園の使命とは「神に仕え」「子どもたち」、またその背後にある家庭に「仕える」という意味でのサービス。別の言い方をすれば「神を愛し、隣人を自分のように愛する」という意味でのサービス業です。

そして帰ってその園 HP を見ていたら保護者の方のカウンセリングも専門の発達心理士がしていて、そういうのあったらいいなと一瞬思ったのですが、一回2時間程度。初回 ¥8,000/日ともありました。

「サービスによって得る対価<お金>が目的で子どもに教育を行う」のど「子どもに教育を行うために<仕える・サービスする>。その対価・結果として<報酬>を得る」。別の言い方をすれば「お金のために教育を行う」のか「教育を行うためにお金をもらうのか」本当に「行為」と「目的」の順序が違うだけで、すべてにおいて。姿勢において差がでることを知りました。

現在もアメリカ資本を中心とするいわゆるグローバリズムが世界中に貧困を創り出しています。世界の過半数の人々「小さな者も大きな者も、富める者も貧しい者も、自由な身分の者も奴隷も、すべての者」が振り回されている現状があります。その結果人々の命が縮められています。「緩やかな死に向かっている」それはなぜか。人間の罪のゆえであるというのが聖書の発想でしょう。

主イエスは言いました「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい(マルコ10:21)」。聖書の基準ははっきりしている。「富は天に積む」と

ということが求められている。自分のために「富を積む」のではない「天に」すなわち「神のために・隣人のため積む」これができない者は罪人である。すなわち、善人はいない。一人もいない。

5. 「神の子羊の登場」がすべてを変える！

しかし、14章に入ると、こうした出来事に解決が起こる様が語られます。すなわち「神の子羊の登場」です。そして「人々の中から贖われた14万4000人」がでます。これも以前丁寧に見ましたから、繰り返しいたしませんけれども、この人々は「神に贖われた教会の群れ」を指します。主イエスの十字架による罪の赦しの出来事を信じて、「贖われた者たち」です。

それで、この「贖う」という言葉。元々の言葉では「ἀγοράζω アゴラゾー」といい、「買う」という意味の言葉です。主なる神によって対価が支払われ、「買われる」ことで神さまに「所有される」こと。これが「贖われる」ということの意味と言われます。

わたしたちは一人一人が罪人なのですけれども、主なる神がそのわたしたちを「ありのまま、価値あるもの」として見てくださっている。欲してくださっている。よく主イエスがわたしたちの身代金として十字架におかかりになられたという表現が聞かれますが、罪のゆえに本当の救いにはならない様々なものに仕えていた私たちを、主イエスがその命をもって、神のもとへと買い戻してくださったという意味となります。

本来、命と命は等価です。お金では買えません。命以外のものと代えることはできないのです。ですからわたしたちの命を買い戻すのに、主が十字架におかかりになって、わたしたちのために仕えてくださっている。命を捧げ尽くしてくださっている。だから、わたしたちは喜びと感謝をもって、わたしたち「も」この命をかけて主のために仕えるのです。「神を愛し」「隣人を愛する」という仕方で「神に栄光を帰す」のです。

赦された罪人には聖霊の力によってそのことが可能です。聖霊の力の第一は「神の愛」をわたしたちの心に加えることです。愛が回復された人間が造る「神の国」を「贖われた者たち」は目指すのです。

これからわたしたちは聖餐を祝います。主イエスがわたしたちの罪を赦すために主がその命を捧げ尽くしてくださった。そのことを心に刻むための食事です。まことの悔い改めの心をもって、しかしまことの感謝をもって、まことの信頼をもってこの食卓につきたいと願います。ここに集うみなさんの上に主の祝福がありますように。共に祈りをあわせましょう。

天の父なる神よ。あなたの御名をたたえます。

ヨハネが見た幻、あなたのビジョンの中に見える永遠の命が今、主の十字架によってわたしたちの手に握られていることに感謝をいたします。この世はサタンの誘惑に満ちていますから、どうか、わたしたちを惑わす者からこの教会の群れを救い出してください。あなたにまことに信頼し、十字架の恵みを、主の愛を携えて、まことに主に生きる群れとして教会に集う一人一人を導いてください。愛する主・イエス・キリストの御名によって祈ります。

配付資料

1. 古代ギリシャ語のゲマトリア (ἡμιτέρας 数値計算)

A α	1	I ι	10	P ρ	100
B β	2	K κ	20	Σ σς	200
Γ γ	3	Λ λ	30	T τ	300
Δ δ	4	M μ	40	Υ υ	400
E ε	5	N ν	50	Φ φ	500
Z ζ	7	Ξ ξ	60	X χ	600
H η	8	O ο	70	Ψ ψ	700
Θ θ	9	Π π	80	Ω ω	800

例 : Μαρία (マリア) = M(40)+α(1)+ρ(100)+ι(10)+α(1) = 152

2. 皇帝ネロのアス銅貨



※紀元1世紀頃・1アス(青銅貨)は1ポンドのパンや1リットルの安ワインと等価であった